

グローバル化する互酬性  
—サモア世界の儀礼財の循環と首長制—

山本 真鳥

博士（文学）

平成28（2016）年度

## 博士論文「グローバル化する互酬性—サモア世界の儀礼財の循環と首長制—」 要約

本論文は、サモア世界——本国と移民社会を合わせたグローバル化するサモア社会文化圏——での数々の変遷を経てなお続く、儀礼財（ファイン・マツト）を巡る交換システムと社会や権力との関わりを描く民族誌の試みである。

まず第 1 章「序論」において、筆者が取り組む互酬性の理論枠について明らかにした。互酬性は現在でもさまざまに大勢の研究者が取り組む魅力ある論題であるが、用語や概念には微妙な差異や混乱があり、その点をきちんと精査して議論を始めないといけない。筆者が基づくモース、サーリンズ、レヴィ=ストロース、ポランニー等の議論を検討し、交換、互酬性、互酬性の中でも、均衡的互酬性と一般的互酬性、また再分配と互酬性の比較を主として検討した。いずれもサモア世界の中での財や現金等のフローを考察するのに重要な概念である。さらに、本論文の中心であるサモアのファイン・マツトに関して、先行研究の検討を行い、課題を抽出した。先行研究はファイン・マツトをどうとらえるかにおいて、両極端になっている。一方は、ファイン・マツトの商品化の側面を強く取り上げる余り儀礼交換におけるやりとりの側面を無視し、他方はファイン・マツトの儀礼的価値にばかり注目するために、その経済的な意味を見逃している。この両方をバランスをとって見ていく必要がある。

第 2 章「サモア社会の概観となりたち」では、サモア諸島、とりわけ西サモア（現在はサモア独立国）の概要を述べたのち、社会の基本的枠組みとなっている称号システム——サモア全体の地縁組織がそれによって統合されていく制度——を 1 つとりあげ、社会組織がどのように成り立っているかを記述分析した。それによって、サモア社会は系譜に依存して一元的に首長称号名間の関係付けが行われるラメージ型の社会ではなく、地縁組織の中の複雑な口頭伝承や会議の席順、カヴァ杯の順位、パラマウント首長等への関与等々に基づく格付けにより成り立つ社会であることを証明した。系譜のような一元的なルールではなく、さまざまな指標によりブリコラージュ的に補強されていたということを示したのである。このために、この社会は首長間の格付けが行われながら、それがやや不安定であるために首長同士、地縁組織同士が競覇的であるという性格を強く持っているのである。このような社会ではかつて首長権力が再分配によって保たれた側面が存在しなかったわけではなかろうが、それに立脚していたとはいえないかもしれない。

第 3 章「交換システムの基本構造」で行ったのは、大量の財の移動の生じる儀礼交換の分析であるが、これはサモア社会を解く大きな鍵となる。儀礼交換が大量に行われる儀礼は必ず、親族・姻族間のトガ財とオロア財を交換するパオロ交換（助力の財と返礼の循環）を伴い、多くのアイガをこれに参加させるようなイモヅル式の財のフローを引き起こすのである。そこでは、ほとんどの財のやりとりが親族・姻族間での互酬的な財の交換で成り立っている。しかし過去の口頭伝承をひもとくとサモアにも主従関係を軸とした再分配の財のフローが認められないわけではない。現在は時として、あたかも儀礼を主宰するアイガの偉大さを示すような大量の財のやりとりが行われているが、実際にそこに集まる財は、主従関係からの貢納ではなく、姻族関係にあるアイガとの間の互酬的交換で得た財なのである。もともと弱かったと思われる再分配機能は、現在ではほとんど見当たらない。過去には特定の首長称号名にだけ限られていた、ファイン・マットのツラファレへの分配や、華美な葬礼といったものが、現在では現金さえ持っていれば——またそれも、海外に実入りの多い移民した親族がいれば——可能となっている、ということは、首長称号名の平準化が進行していることと無縁ではない。

第 4 章「交換財の変容」は、財のカテゴリーに切り込んで、その新しい財の取り込み方や、また、財のカテゴリー内の品目の変容はない場合も、財の質が大きく変化している点などを分析している。サモア社会は歴史の進行に伴って、この社会を成り立たせる上で大切な儀礼交換制度を、新しい財を取り込んだり（その品目の中には現金すらとりこまれている）、財の品質を落としたりして、微妙な対応をしてきた。まさに親族・姻族間の儀礼交換が、この社会で果たす重要な役割を示しているのであるが、それと同様に見逃せないのは、市場経済の進展とともに、現金で購入可能な財が交換に多く用いられるようになり、その結果として儀礼交換をめぐる経済関係に大きな変化をもたらしたということである。

第 5 章「移民と本国社会」は、いわゆる MIRAB 国家としてのサモア独立国（西サモア）が第二次大戦以後直面した移民現象を記述・分析している。最初は戦後の出稼ぎとして始まった海外移民は、やがて環太平洋先進諸国の都市にサモア人コミュニティが成立するに伴い、定着している。既に、本国両サモアの人口をあわせて 244,000（2010 年、2011 年のセンサス）ほどであるが、アンダーカウントを計算に入れずとも、ニュージーランドとオーストラリア、アメリカ合衆国をあわせたサモア人人口はこれを凌駕している。サモア移民の場合、本国親族への送金というのが、海外移民の大きな目的とされているし、実際に多額の送金があり、国家としての本国もそれで貿易赤字を埋めているところがある。興味

深いのは、そのような送金を引き出す、「持てる者は持てない者に分け与える」という一般的互酬性の経済理念が、「なにかお返しをしなくては」という本国人からの反対給付を呼び、また、逆に送金を引き出すための手段として、本国に豊富に存在するが海外では作れないもの、ファイン・マットや称号名などを海外移民に贈与する、ということが行われているということである。その結果として、市場交換とは別に、恒常的な海外からの送金、そして海外へのファイン・マットや称号名のフローが生じている。ファイン・マットはそうにして作られるトランスナショナルなサモア世界の「通貨」として、また一般的互酬性の共同体のシンボルとしてサモア人のアイデンティティに関わるものとなっているのである。

第 6 章「儀礼交換と称号システム」は、第 5 章と時間が相前後しているが、行われていることの基本は、ほぼ同年代のものである。これは、第 5 章が移民を中心に書かれているのに対して、ここで扱っているのは本国の称号システムへの影響である。称号システムについては第 2 章で詳述している。村落部の地縁共同体を存在の根とするサモアの親族集団が成り立っていくために、地元でさまざまな機会に儀礼交換を行わなくてはならないが、そのためには現金の出費が不可欠となってきた。土地保有集団のアイガは、その長として称号名をもった家長すなわちマタイをいただいているが、マタイは土地をどんなにうまく活用しても、儀礼交換に必要なだけの現金を調達できず、同じアイガで都市や海外で働いて現金にアクセスできる人の協力を仰がなくてはならない。そのようにして、都市住民や海外在住者にマタイ称号名授与が行われるようになった。今日のアイガはアイガの土地を守り、在地アイガの経営にあたるマタイと、都市や海外から現金を調達して協力するマタイとの分業でなりたっている。すなわち称号分割の大きな動機の裏に儀礼交換があると論じている。

第 7 章「ファイン・マットの行方」は 1990 年代半ば頃から生じたファイン・マット復興運動を詳述し、ファイン・マットの今後について考察している。ファイン・マット復興運動を始めたのは、ウイメン・イン・ビジネスという NGO であった。女性の職業定着や現金収入増進についてのプロジェクトを実施しているこの団体は、女性が誇りとしてきたファイン・マットの品質を取り戻すことによって、女性の誇り、しいてはサモアの誇りを取り戻す意図をもってこの運動に取り組んだのであるが、同時にファイン・マットの編み手がしかるべき現金収入を得るという道も模索している。ある段階で政府に請願を行ってから、政府も復興をサポートする事業を始めた。政府は多くの女性を巻き込み厳格な基準で

の超上質ファイン・マットを増産する計画をたてた。ところがそのようなファイン・マットは、もともと大変手間暇のかかる品であるので、増産はなかなか難しい。また大変高価なものであるため、結局買い手は海外在住者が多くを占め、国内の儀礼交換に登場することはほぼない。また、いざというときのために退蔵されている事例がほとんどである。一方、首相演説により放逐された粗悪品ファイン・マットの代わりとして民間でもつばら重用されてきたのが、粗悪品と変わらない品質であるが、しかしサイズが大きい大ファイン・マットであった。けれども、政府規格よりは落ちるが、かつてのものよりずっと上質で薄手のファイン・マット——政府の計画の派生で出てきた——が次第に儀礼交換の場に登場してきている。今後、この新しい政策が何をもたらすのか、注目が必要である。ただ基本的に儀礼交換はサモア社会で欠かせないものなのである。

本論文の主たる議論は、ファイン・マットという儀礼財が粗悪化、復興という運命をたどりながら、サモア社会の儀礼交換に用いられ続けてきたのであるが、その儀礼財を中心に、あわせてサモアという首長制に基づく社会の変化を描くことに集中している。とりわけ、筆者が 1978 年に調査に入ってからの変化は、断続的な調査により目の当たりにすることができた。サモア社会とりわけ西サモア（のちにはサモア独立国）は戦後に海外移民が急増し、その送金が社会のあり方を大きく変えたのである。

本来存在していたサモアの首長制は、ポリネシアに一般的な再分配によってもつばら支えられる首長制ではなく、その経済基盤はやや脆弱であり、競争的性格をもっていた。そして、サモア社会ではそれを補うべく姻族・親族間互酬性が重要性を帯びていた。もちろん再分配も現在よりは強く存在していた可能性はあるが、少なくとも首長称号名の格付がとりわけ 20 世紀になってから平準化すると共に、互酬的贈与交換によって支えられる儀礼交換を行って、首長称号名の名声を維持する傾向が高まったとみられる。この点は、A.ストラザーンの描くメルパのビッグマンが、再分配ではなく互酬的交換を行っているにもかかわらず、大量の財を贈与され、大量の財を贈与することによって名声を維持していることにも似ている。

その結果として盛んに行われる儀礼交換は、親族間の交換としての構造を有していた。それは、トガ（女財）とオロア（男財）の財のカテゴリー分けであり、婚姻に際して行われる花嫁方と花婿方との間の交換では前者からトガ財が、後者からはオロア財が贈られ、互いに財を取り交わす形となっていたが、儀礼交換を執り行う当事者アイガに対する姻族

たちは、かつて縁組を行ったときの男方／女方の別に則して贈る財を調整していた。儀礼交換はこのように、互いに姻族となる親族集団の連帯のネットワークを広げる意味をもっていた。財のカテゴリーは、この社会に欧米から新しい財が入ってくるとそれを柔軟に取り込むことを行っていたが、そのようにして、このシステムは自らを強化する力をもっていた。しかし、この男方と女方の財の区別は、後に移民が増えてくると、移民との間で、移民は男財を、本国人は女財を送るというように変化していく。

この国は現代の南太平洋に位置し、さしたる資源も持たない極小国家として、戦後移民を環太平洋諸国に送り込み、そうやって移民の送金で何とか生き延びてきたのであるが、その移民の送金は本国社会の儀礼交換や首長制に大きなインパクトをもっていた。移民の送金は、この社会の古くからの規範としてある一般的互酬性の論理で、すなわち、「持てる者が持たざる者と自分のものを分け合う」という理念の下に行われた。移民は持てる者なので、持っているものを本国の親族と分け合うことは当然であった。しかし一方で、一方的に財を贈られるばかりであることを好まない本国人は、反対給付として本国で持っていて移民が持っていないもの、称号名とファイン・マットを移民へ贈り、結果としてそれらは移民社会にどんどん流出したのである。一方でまた移民から現金を引き出すために、本国人が呼び水としての称号名やファイン・マットを移民に贈ることが多く行われた。

称号名とファイン・マットはそれによって大きな変更を被ることになった、ということ本文中に論証した通りである。称号名は分割することにより、在地マタイと不在マタイとして分業によって親族集団の切り盛りをするという体制を産むこととなった。称号名の分割は止まらず、今や増殖したマタイ名は、実質的に家長の役割を果たしていない若者も入手するようになっている。ファイン・マットは、数を増やす必要上から粗悪化に陥った。送金の反対給付として海外向けに贈る必要があったと共に、移民から現金を引き出す目的での贈与も行われた。両方ともそうやって増殖していき、希少価値を減じていったのである。

そのような移民コミュニティでのファイン・マットの意味も検討の必要がある。移民社会においてファイン・マットの交換はサモア人としてのアイデンティティに関わるものとなった。ファイン・マットのやりとりが行われる儀礼交換——そこではとりもなおさず現金も飛び交うのだが——に参加すること、故郷の儀礼交換に出席したり、送金したりすることは、大いにアイデンティティに関わる事項であり、これに参加しない人は、コミュニティの周辺や圏外に位置するものとみなされる。もちろん、自ら逃げだそうとする人々も

いる。しかし、粗悪品化も大きな要因であるが、大量のファイン・マットが移民社会に滞留するようになってしまった。

本国人と移民とをあわせ、ある種共通の倫理観や文化的価値観をもち、広く交流やコミュニケーションが行われている全体をあわせ、筆者は「サモア世界」と呼ぶようにしている。サモア世界はグローバリゼーションにともなって出現した。この空間が均質であるとは考えていないが、何らかの共通価値をもっており、それに突き動かされたり、反発したりする。送金という形でサモア世界の中心は支えられているが、その送金は恐らく、中心部分の文化的伝統的ヘゲモニーと深く関わっている。もしも、移民がこぞってそうした価値にそっぽを向いたら、本国社会は没落してしまうだろう。今のところそのような気配はないが、未来永劫いつまでも本国のヘゲモニーが続くとも思われない。

おそらく、ファイン・マット復興運動は、そうした本国のヘゲモニーを維持する力をもつことと関係している。そのような精密なファイン・マットの製作は、サモア外に住む人々には当面は縁がないことだろう。そのようなファイン・マットを賞賛し、またお金さえあれば、購入する、と公言することはあるだろうけれども。ファイン・マット復興運動によって、しばらくは本国社会のヘゲモニーは続くであろう。

これらのファイン・マットの商品化の動きを見て、ファイン・マットが市場経済の中に入ってきたので、この社会の市場経済化もどんどん進行していると考えer人は多いに違いない。ただ、われわれが留意しなくてはならないのは、ファイン・マットが商品化しているといっても、なぜ大金を出してまでファイン・マットを入手したいという人がいるかということである。それは儀礼交換に欠かせないからである。つまり、ファイン・マットは商品としての顔も交換財としての顔も合わせ持っているということであり、入手経路と利用経路はコンテキストが異なるということになる。それらの新しい上質ファイン・マットは、多くの場合退蔵されて、なかなか人目に触れることが少ない。しかし、それらはここぞという場面、親の葬式や娘の結婚式などのときに衣装ケースの中やベッドの下から取り出されて、陽の目を見、贈与されるのである。

クラ交換が多くの変容を受けつつも継続しているように、ファイン・マットとサモアの贈与交換は簡単には廃れそうもない。